



## 留 学 記

# 英 国

児 玉 実 用

英国ではそもそも第一印象からが良くて結局初めから終りまでエンジョイし尽した。

カレーからの連絡船で、この海峡のいろんな歴史や物語を思い泛べつつ食堂に行くと、隣席にいたデヴォンシャの老婦人が美しい英国の春と、その雨すらジェントルだ、との話をして私に楽しい夢を呉れた。デッキの椅子に坐ると、向いの紳士が英国のお金の勘定はむつかしいからと熱心にその説明をしてくれる。みんなやさしい。そうこうするうちにドーヴァーの白亜の崖が霞んで見え始めた。船が着く。船客は少しも先を争うことなく実に整然。青函連絡船のことを描いていた自分の胸が恥かしかつた。税関も有つてなき有様で「申告物はないでしょうね」「ありません」「オーライ」「これで済んだのですか」「シュアリ。早く行きなさい」と言った調子。どの国にも劣らず本当に気持ちのいい入国だった。待ち受けていたゴールデン・アロー号は流石に豪華列車。チューダー風な一切の装飾。フンダンにティーと軽食軽菓が出る。かえつてのどが渇く。プフェーで冷たい物を飲む。座席に帰つて窓外を眺めると、霧の絶え間から美しい緑のメドーが見えた。こじんまりとした

果樹園。曲りくねつたゆるやかな小川。早咲きの春の花々。彼方に続くなだらかな丘。時々可愛い仔羊が追っかけごっこをしているのを見ると、ひとりで心の緊張がほごされてきて言い知れない平安の微笑が湧いてくるのだ。フト見ると、やっと私を探し当てたと言つた様子で、先刻のプフェーのボーイが傍に佇んで言う。「申しあげた支払額には実はチップもこめていましたので、その上において行かれたチップは受け取るべきでないものです。おかえしにきました」と。僅かなことにも何と紳士的！着くとロンドンには深い霧であつた。若い英人に迎えられ、古風な自動車で宿に入った。グッド・フライデーには聖ポール、イースターにはウェストミンスター。こうしてそろそろロンドンの生活が始まつた。

私の場合、長い留学とは言えない。暫くともまつて十九世紀英文学研究の動向を視察することであつた。オックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンなどの諸大学を回り、専攻の学者達と会談した。それらを通じて言えることは、研究法は必ずしも新しくはないが、非常に地道で、ガツチリと原典に取つ組み、同時に古今の作品をウンと読んで、そこから

自分の文学観を掴み出し、その本領に立って  
言を吐く、いわば大なる学識と識見の学風で  
あった。往々日本の学者がとりこになり易い  
いわゆる学界の流れなどとはおよそ絶縁の姿  
で、ただ自分の研究に堂々たる誇りと欲びと  
を示している様子は全く嬉しかった。その後  
会ったハーバート・リード卿もその通り。浪  
曼主義と言うものについては、現代詩人のJ  
・C・ホール氏すら「われわれ英国人は本来浪  
曼的でかつ論理的。矛盾しているようで根に  
は浪漫的要素がいつも流れている」と笑いな  
がら現今流れている軽薄な反浪漫主義者達を  
たしなめていたのは興味深かった。

文献的な調べごとは大英博物館に通った。  
ギャラリーや古い作家の遺宅や墓地へも行っ  
た。その往復にはロンドンの街を歩きに歩き  
回った。古物商までも。また文学と関係のあ  
る旅に出た。

英国は何と言っても歴史と伝統の国。紳士  
淑女の国。社会倫理の水準が高く、人々は親  
切で友愛的助力的、よく約束を守り、全幅的  
に信頼がおける。一寸道に迷い立ちどまって  
地図でも掀げようものなら、巡査でも誰でも  
“what's your trouble?”と寄りこいで、ま

るで拉致するように肩を掴み、「わかった」  
と言う所まで連れて行って教える。買ひ物の  
時店員は、客の要求品が見つかるまで懸命に  
探す——待つ間がじれったいくらい——それ  
でも見付からないと決して次善の品で間に合  
わさせようとはしない。詫びを言って、その  
品ならどこそこへ行け、と必ず店名と番地ま  
で示してしかるべき他店を推薦する。尋ねご  
と、依頼ごとには、すぐ賢明に察知して、相  
手にとって一番良いこと、よろこぶことをし  
て呉れる。すべて「あなたにベストを」と言  
う精神。これに浸っているうちいつの間  
か、およそ日本で持ち慣れたもろもろの心配  
や不安なんか一切喪失してしまっていた。だ  
からと言ってつけこんではいけない。あちら  
で英国人をよく言わない日本人や外国人にそ  
の理由をきいて見ると、みんな限界以上につ  
けこんで甘え、それが不如意だったことに原  
因があったように思えた。英国人は徹底的に  
良い意味での個人主義。だから自由で、一城  
の主である。城壁からは何びとと雖も一歩た  
りとも入ることは許さない。その代りその線  
ギリギリまでは最高に献身奉仕的である。心  
得ねばならない。

私は長年ラファエル前派の詩人画家D・G・  
ロセッティを手がけているのでロンドンや地  
方の彼と関係ある所を回った。中でも彼の近  
親者中唯一の存命者H・ロセッティ・アンジェ  
リ女史(八十三歳)を訪ねて長時間の歓待と  
談話の機を得たことは絶好事であった。記念  
にと貰った十九世紀風な館のブローチと古い  
皿とは永い思い出の品となるだろう。マーゲ  
ートに近い海辺の彼の終焉の地にも行った。  
その町では——また後日訪れたティンターン  
・アペイに近いチェブストウでも——私を日  
本人で最初の来訪者だと非常に珍らしがって  
親切にもてなしてくれたのは面白かった。  
ストラットフォードの沙翁劇、湖北地方の  
美しい自然、英蘇国境からエディンバラやハ  
イランドの旅、キャンタベリー、ソールズベリ、  
バス、プリストルからウェイルズへの旅、時  
は五月、小鳥と花、行くところすべて今日  
もまた愉しきは続くとはかりに、この国を訪  
れた幸せを満喫した。テムズもよし、ロンド  
ン塔もよし、いや今となってはあの二階バ  
スで“Any more there?”と言いつつ切符  
を切る女車掌の声まで懐しい。

(文学部教授、英文学)

# 北朝鮮紀行

和田 洋一



筆者の訪問した平壤の学校、左端は校長

## 日朝友好の旗

北朝鮮の対外文化連絡協会の招きをうけて、われわれ日朝協会の代表十一名が、羽田を出発したのは、昨年の十月四日であった。

日朝友好を目的とするこの使節団の団長は社会党衆議院議員の穂積七郎氏で、あとはお寺の住職、都議員、作家、県教組の書記長、ネクタイの図案家、国鉄労働者、日朝協会の活動家、事務担当者など、大学関係者は私ひとりであった。

一行をのせたBOACのジェット機は、鹿兒島の上空から一路南方へ飛んだ。目的地が北朝鮮だというのに、北朝鮮を背中にして逆の方向へ飛んでいくのだから奇妙なものだった。香港では二晩とまることになった。ここに住んでいる中国人の生活のみじめさは、改めて私の胸を打った。中国の全土が半植民地的状態から解放されているというのに、ここだけは昔のままではないか、歩道の上にすわりこんで新聞を売っている子供たちの姿にカメラを向けようとした私は、そうした行為がヒューマニズムに反するように思われて、撮影を断念した。

中国の国境から広州までは展望車にのせて

もらった。広州のホテルで一泊して、翌朝はプロペラ機で北へ飛んだが、途中で長沙、武漢、鄭州ととまり、四度目になつと北京の飛行場についた。

出迎えにきてくれたのは、北京の朝鮮大使館の人たちと、中国の和平委員会の人たちである。大使館の参事官が、「平壤へは汽車でいつて頂きます。出発は明日の午後三時ですから、今夜はホテルでゆっくりご静養下さい」といつてくれたので、やれやれ助かったと思つた。もつとも飛行機だと平壤まで五時間、汽車だと二十八時間で、ちょうど一昼夜がう。

## 快適な軟臥車

日本の外務省は、朝鮮民主主義人民共和国へ行くといえは、決して旅券を出さない。われわれの場合は、それで北京の和平委員会にお願いして招待の電報を打ってもらい、それでもかかても中国行きの旅券を手にいれることができたのである。われわれは和平委員会の好意にたいして感謝の意を表明するため、翌朝全員打ちそろつて委員会を訪問し、そのあとしばらく静かな散歩を楽しんだ。

北京から二十八時間というながい汽車の

旅。しかしわれわれはさいわいにも快適な軌  
臥車の中で、悠々と時をすごすことができた。  
日本は一等寝台と二等寝台、ドイツはシユラ  
ーワーゲン（眠る車）と、リーゲワーゲン  
（横になる車）、そして中国は軟臥車と硬臥車  
という言葉で、それぞれ上等と上等でない寝  
台とを区別している。鴨緑江の北岸の安東へ

ついたのは十月九日のおひる前、やがて列車  
はゆるゆると鴨緑江をわたって南岸の新義州  
駅にとまった。われわれはようやく北朝鮮へ  
入国することができたのである。どこかで金  
日成元帥の歌を合唱している。朝鮮服の女性  
の姿がつきつきと目にはいる。平壤の駅へつ  
いたときは、もう薄くらがりだった。われわ  
れは平壤国際ホテルに一先ず落ちついたが、  
その夜は対文協主催の歓迎会、そして翌朝か  
らさっそく見学が始まった。午前はどこ、午  
後はどこという風に、そして夜のスケジュ  
ールもちゃんとくまられた。

### 平壤の学校

社会主義国では、外国のお客さんにみせる  
場所、みせたい場所というのは大体きまっ  
ていて、一方、お客さんの希望もなるべくか  
なえるように考えてくれるというのが普通であ

る。われわれは口をそろえて、学校を参観し  
たいといった。このねがいはもちろん容易に  
かなえられた。

校長先生は三十五歳、そしてあとの先生は  
全部校長先生より若いということであった。  
つまり年よりは新しくのびてゆく子供たちを  
指導する資格がないのである。新興の社会主  
義国としては当然のことであろう。学校の運  
動場が広いだけではなく、学校の畑があり果  
樹園があり、家畜小屋があり、生徒たちがそ  
こで野菜をつくったり果物の手入れをした  
り、家畜の世話をしたりする。そしてその学  
校が平壤の市内にあるのだから、羨ましいと  
思った。生徒の数も一クラス四十名をこえる  
ことはないということだった。

### 子供のための百貨店

われわれはまた口をそろえて百貨店へつれ  
て行ってほしいといった。この要求はすぐに  
はかなえられなかったし、対文協の側では、  
百貨店をみせることを喜んでいないようにも  
みえた。考えてみればもつともである。日本  
の百貨店の品物の豊富さ、建物の大きさは、  
ヨーロッパの先進諸国をしのいでいるし、日  
本からやってきたお客が北朝鮮の貧弱な百貨

店と日本のとを比較するということは、朝鮮  
人側としてやりきれない気持ちにもなるだろ  
う。しかしわれわれとしては、日本へ帰れば  
必ず「北朝鮮の消費物資はどうか」「百貨店  
はどうだった」という質問を受けるのだけ  
で、みておかないと話ができないというわけ  
で、熱心に希望した。

われわれの希望はかなえられ、最初に平壤  
駅のすぐわきにある五階建てのデパートへ案内された。われわれの共通の印象は、そんな  
に貧弱ではない、思ったより品物があるとい  
うことだった。しかし値段は日本円に換算す  
ると、日本の品物より二倍ないし一倍半ぐら  
い高いように思えた。もうひとつ、子供のた  
めの百貨店があつて、そこへも案内された  
が、そこは駅の近くの百貨店よりはるかに品  
物が豊富で、色彩も明るく美しく、北朝鮮は  
やはり子供を大切にしているのだなあとか、  
朝鮮戦争がすんでからまだ十年もたつてない  
のに、たいしたものだからかという声が、われわ  
れのあいだからもれた。

### 解放された祖国

滞在日数はわずかに十六日、そうあれやこれ  
や見られるはずはなかったが、平壤では美術

博物館、革命博物館、祖国解放戦争記念館、工業展示館、農業展示館、紡績工場、絹織物工場、平安南道立病院、金策工業大学などを見学させてもらい、大劇場では舞踊劇を二度みせてもらった。平壤からすこしはなれたところにある黄海製鉄所、アメリカ兵が朝鮮の母親たち、子供たちに惨虐なふるまいをしたことで有名な信川、三十八度線にある古い都市開城、それから板門店へも案内してもらった。日本海沿岸は咸興、興南、元山、そして金剛山など。金剛山は朝鮮側として外国のお客さんにどうしてもみてほしい名勝の地で、われわれは金剛山ホテルに一泊しただけであったが、あとから、せめて三泊はしなければとか、一週間は滞在しなければ金剛山のよきは分らないなどと、何べんもいわれた。

北朝鮮にある博物館、記念館は、朝鮮民族が日本帝国主義によってどんなに抑圧され、苦しめられたか、そして朝鮮戦争のときにアメリカ帝国主義の軍隊が、どのような悪虐無道をおこなったかを、写真その他さまざまな証拠品を通して教えている。歴史の年代を追って十九世紀から二十世紀の陳列室へはいると、まもなく日韓併合の時期になって、それ

から太平洋戦争の終了とともに日本帝国主義、軍国主義の支配がおわって、われわれ日本人はなんとなくほっとする。日本人の朝鮮人にたいする抑圧と搾取が一九四五年とともに永久におわったのであれば、われわれもいづらか気が楽であるが、日韓会談妥結とともに、アメリカ兵にかわって日本の自衛隊が南朝鮮に進出し、日本の資本家が低賃金で南朝鮮の労働者をこきつかい、日本民族がまたもや朝鮮民族のうらみと憎しみをかうようなことになっては、全くやりきれないと、博物館を出たあとつくづく思った。大劇場で二晩みせてもらった舞踊劇は、二つとも朝鮮の抗日バルチザン活動を扱ったもので、日本の軍人がいづれの場合も劇の中では、かたき役になっていた。今日、北朝鮮の民衆は、大劇場の中で歌とおどりを楽しみながら、一方で日本帝国主義、軍国主義を憎むことを教えられているのである。

北朝鮮では、日本の人民と日本の帝国主義者とをはっきり区別しており日本人だから敵視するというようなことは全くない。私たちが十一名が日本の人民として扱われたことはいうまでもない。

### 北朝鮮の現状

平壤の町はもちろん、北朝鮮の都市はすべて清潔で静かだった。そしてその清潔さと静けさの中で、私は途中みてきた香港の不潔と頹廢とを何度となく思い出した。

北朝鮮をほめる材料も、くさす材料も、ともに山のようにあるだろう。しかし北朝鮮の現状について語る前に、われわれはすくなくとも日本が三十五年のながきにわたって朝鮮をしいたげてきたこと、朝鮮戦争のときにアメリカ空軍の爆撃によって北朝鮮全土が徹底的に破壊され、そのあとに建設が始まって、まだ十年もたっていないという事実だけはしっかり頭にいれておかねばならないだろう。

十月二十五日の朝、われわれは平壤の飛行場をはなれ、北京に向けて飛んだ。私の仲間が北京でさらに一週間滞在し、秋を楽しみながら市内見学をつづけることになったが、私はもうこれ以上学校を休んでは申訳ないと思つて、ただひとり広州行きの飛行機にのり込んだ。

(文学部長、新聞学原論)